

断章群

私はなるべく誤らないために、「完成してから出す」という行為をひかえている。

真実[Wahrheit]は、free的な側面とliberty的な側面を両方抱えている。そのまま現れるものとしての真実と、己が選び引き受ける真実。

飾らないことの、文字通りの装飾のなさへ登る。

「この言葉は人を動かすだろう」などと手応えをもっている時、動かされるのはせいぜい己ぐらいのものである。

悟性が英語で understanding なのを見るに、理解するとは、対象を何がしかの枠に入れたりラベルを貼ったりして、「理解したと思うこと」なのかもしれない。

剛性のある「強い心」を夢に観たことがあった。然しそのようなものは、もしも折られた時には、二度と元の形に戻れない壊れ物となるだろう。

生まれ落ちるということ自体が、欠けることでもある。だが、悲観はいらない。

自己は一瞬一瞬に存在し、かつ、存在した事実は何にも抹消できない。それが強いて言うなら永遠性なのである。

「無為に過ごしたくない」などと思ったその瞬間から、無為にもなっている。

「現実」と「真実」は異なることがあるかもしれない。信じたい物事を、純粹に信じてみるのも良いのかもしれない。

Mechanic“M”

眼鏡の奥で、双眸が血走っていた。
規格外といえる工具は
破壊のために用意されていた。
彼はこの世のすべてを「解体」する——
そんなふうに見えた。
机の上には、
ネジのひとつも残らなかった。
「修理」よりも、「改造」よりも、
彼は「解体」を愛していた。

2

すべてを破壊しきった。
気も済んだ。
そして彼はやめた——「解体」を。
眼鏡の奥のまなざしは穏やかに、
手のひらの上のからくりを見つめる
——それが壊されることも最早ない——
机の上では、
ネジがいつも同じ位置に戻される。
「修理」よりも、「改造」よりも、
さらには「解体」よりも
今は——ほんとうは、
彼は「構造」を愛していた。

Endorphin

青と白とが流れをなしている。
その行き着く先では、
砂塵や瘴気を塞ぐ。
枠組みの奥の視線が語るのは、

探すことに飽き足らぬ
研究者の態度。
悟性を一步遅らせるずれの中に
その人そのものというのが立っている。

lösen

瞳孔ともつかぬ黒点のなかからは
構造が透けて視えていて、
それはいたって精密に
対象を分解する。
然し屈強なものとして語られるのではなく、
本来は一步引いているような存在である。
なおもその湛えたる片笑み、
私にとっては好ましい影の佇まい。

赤い髪

流れ、流れの赤い髪。
流れるその身は行き先を識らない。
それどころかだ、
己が誰なのかさえもわからない。
それでも生きんとする意思だけが
彼の眼に光を宿らせた。
流れ、流れの赤い髪は、
荒れ野の風に身をゆだねて。

回心的強度

17:56 ふと思ひ立ち、この野帳の最後のページの次の余白に「よくできました」と書く。オリーブの葉のような装飾をつけて――これは私がかつて行った創作に由来するものだが今は創作上のキャラでなく己に向かって、その言葉を言っているわけだ。尤も「よくできた」というのは評価

の色のある言葉で、それに依らずとも人は立てると思うが、それでもなお己が己に「よくできた」と言葉をかけたくなる日が、あるのだなと識った。

18:03 何度も、何度も、己に出遭い、何度も、何度も、真実を識る。

18:05 つまり、世界の見方は、世界の成立の仕方は、その枠は幾度でも組み換わる。